

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）は3月29日に都内で、被災地の物産品などを販売する「東北応援ビレッジ」を開催した。

震災から2年が経過することを踏まえ、被災地の復興などの問題を忘れないようにしてもらうことが狙い。岩手・宮城・福島のNPO法人などによる19店舗が出店。ガレキでつくったキーホルダーや、サイダー、味噌といった物産品などを販売した。

このうち、宮城県石巻市で女性を支援する「のぞみプロジェクト」は、津波で流された陶器などの破片を使ったアクセサリーを販売し、多くの人が足を

止めた。

市内の女性に対する仕事とコミュニティづくりなどを目的に、2012年10月から活動を開始。現在は、13人がネックレスやピアスなどを製作しているという。

同プロジェクトの佐々木ゆうこさんは「これまで全国から手を差し伸べられたさまざまな支援への感謝の気持ちも伝えられれば、一歩ずつ前に進みたい」と語った。

（福祉新聞・第2617号 2013年4月8日）

日本財団はこのほど、障害のあるアーティストの経済的自立を後押しする寄付プロジェクト「パラリンアート」を開始した。障害者が制作した絵画の複製を民間団体に貸すことで得られる報酬を還元する仕組みで、随時アーティストも募集している。

現在の登録は、アーティストが70人で、作品は150点。会費を納めた民間団体から作品が選ばれるごとに、アーティストには報酬として年1万1,550円または2万3,100円が支払われる。障害者には収

入アップ、民間団体には社会貢献というメリットがある。

日本財団の長谷川隆治氏は「社会福祉法人にはアーティストの輩出と、会員としての参加の両方で協力してほしい」と話す。2013年度中に6,000点に増やすのが目標だ。

問い合わせはパラリンアート運営事務局（☎03-6436-0035）まで。

（福祉新聞・第2618号 2013年4月15日）

全国社会福祉協議会（全社協）のボランティア・市民活動支援実践研究会は3月31日、障害者や高齢者などをボランティア活動の担い手として積極的に活用することを提案した手引『「誰もが必要とされる」たくさんのHAPPYを作り出すコーディネートのススメ』を作成した。

手引は、視覚障害のある女性が傾聴ボランティア活動を通じて社会とのつながりや社会に役立つという自己有用感を取り戻していく物語を通じ、ボラン

ティアコーディネーターに必要な相談援助技術などを紹介している。

社会参加を促す機会としてボランティア活動を捉え、社会的排除・孤立状態にある人の参加を促すようコーディネートの役割に位置付けたことが特徴だ。

手引は市区町村社協に送られ、ボランティアコーディネーターの参考書として活用される。

（福祉新聞・第2619号 2013年4月22日）